

マレーシア華文文学の高潮と低潮

——その歴史的社会的背景——

今 富 正 巳

前 言

華人——中国人——のマレー半島への渡来の歴史は、十世紀以前に遡るものと推測されているが、大量の華人が所謂華僑として南来したのは、十九世紀末葉乃至二十世紀以降、英国人の該地の植民地経営の需要に応じて移民してからのことである。

英国人がこの地に土地を獲得したのは、フランス・ライトが1786年にペナン島を占有したのに始るが、早くも1800年には同地に広東人・福建人の寺廟として広福宮が建立され、1801年には客家人の同郷団体組織として嘉応会館が設立されている。これらは英国人と華人の相関関係や華人の大量渡来を象徴する事実である。

鄭良樹⁽¹⁾は南渡した華人がマレー半島にもたらした中華文化として次の五項目を挙げている。

1. まず入って来たのは秘密結社——私会党——で、これは本来反清復明を目的とする天地会の分枝組織で、マレーには義興、和成、海山及び華生などの派があった。これらは、華人の血縁・地縁団体が未発達な段階で華人社会を掩護し支配した地下組織である。それはまた犯罪事件の源でもあった。

2. 華人が未知の荒蕪地に入ったとき、まず生命の安全を祈り求めるために、郷里の神仏をもちこんだ。無教育の華人がそうしたのは必然的なことであり、最も手取り早いことであった。これは私会党とともに最初にマレーにもちこまれた中華文化である。華人の神仏は仏教、道教から関帝、天后宮、大伯公等々を祀るものだが

甚だ多種である。これら寺廟は郷党の親睦団結や郷党内部の紛争調停なども行ない、次に出現した会館の役目を代って果していた。

3. 神仏の寺廟が建立されるのに随って、血縁地縁の郷党団体——宗郷会館——がマレーの各地に設立された。宗郷会館は同郷人が先に建立した寺廟と密接不可分の関係にあり、中には会館内の一室に一二の神仏の祭壇を設けるものもあった。神仏を祭る寺廟と会館はともに郷党の福祉をはかり、親睦団結を求め、相互に助け合う自衛的な目的をもっているもので、両者の機能は分ち難い側面がある。

会館は血縁や地縁を凝集力としているので自己以外の団体には対抗的に対応する性質がある。時には相互の敵対抗争事件も免れない。そこでより上位の第三者の力の干渉によって、辛うじて平和が保たれることもあった。

4. 次にもたらされた中華文化は華文学校である。民国以前は若干の旧式私塾があるのみで、その一部は1930年代まで存続したが、辛亥革命以後の中国の現代化に伴い、新式の華文小学校が出現し、ついで小学校卒業者を収容するために中学・高校が設立されるに至った。

5. 中華文化の普及と発展に貢献したものとして、華文学校とともに華字新聞が挙げられる。1881年に始った《叻報》を嚆矢として、多数の新聞が現れた。これらの新聞は中国の新聞の通例にならない多彩な文芸副刊——文芸欄——を設けた。これが馬華文学——マレーシア華文文学——の揺籃となった⁽²⁾。

鄭良樹は南来華人は本来無教養であり、中国政府や植民当局の冷淡な処遇の中にありながら

赤手空拳、自力更生で中華文化をもたらし発展させたとしている。

如上の観察に立脚すれば、馬華文学は、単に安易に中国から移植されたものではなく、南来華人が自己を圍繞する特異な客観条件に適応しつつ、自力更生の精神を以て営々としてつくりあげた、中華文化の精華であることが理解されよう。馬華文学は、マレーシアの華人社会の生活と意識を反映するものだが、複合社会なるが故に存在する特殊な問題、例えばイスラム信仰を基礎とする国是、土着人優先主義——ブミプトラ——、言語や民族問題などの議論を禁止した *Sensible Issue*——敏感問題という——などによって、華人は物心両面にわたって束縛されていると感じている。そこから生ずる鬱屈した心理は馬華文学にも反映される。

少数派の常として華人はアイデンティティの確認を求めてやまない。華人の民族意識は歴史の上に起った事件とともに形成されて来た。辛亥革命、五四以来の革命、抗日戦争などはすべて華人の民族意識の形成と強化に役立った。そして、華人の意識形態の頂点に位置するものが、馬華文学である。

前述の如く、現在マレーシアの華人をとりまく環境は、文化のイスラム化、一元化を強く指向する政府のもとにあり、必ずしも華人の好む方向に沿っているものではない。華人アイデンティティは如何にすれば確認されるのか。失われつつある民族の尊厳は如何にすれば回復できるのか。憲法はマレー語を唯一の国語として制定しているが、究極のところ華語の運命はどうなるのか。華語を維持存続させるには如何にすべきか。現在華人社会はこれらの難問に適切に対応できるのだろうか。これらの問題は殆んどすべてが政治的な性格を帯びるものであり、単なる文化問題ではない。しかし、現実の環境条件のもとで、自己主張のための有効な手段を失いつつある華人に残される手段はやはり、文化の領域に限られてくる。そこに文学活動の出番があるし、馬華文学活動者もその点を自覚している。馬華文学には一定の使命と任務がある。

本文はこの数年来の現地での聴き取り資料を主とし、文書文献資料と併せて検討し論述したものである。

§1 マレーシアとシンガポール

第二次大戦後、多くの旧植民地国家が独立したが、マレーシア、シンガポールもそのような国である。この地域はもと英国の植民地であった。英国は戦後のはじめ、その指導の下に自治領マラヤ連合 (MALAYAN UNION) をつくる案をもったが、マレー人の反対に遭い、独立国とすることにした。マレー人が反対した理由の一つは、旧来の政治機構が破壊されることに対するマレー人上層階層からの反対があったことと“マラヤに生れた者に平等に権利を与える”という所定の原則から中国系市民——華人——の人口がマレー人人口を超えればマラヤが事実上華人優勢の国家になるかも知れないという不安があったためである。この経緯の中にもこの地域の民族問題就中マレー人と華人の關係にただならぬものであることがわかる。

自治領案が失敗した後、英国は1948年、マラヤ連邦 (FEDERATION OF MALAYA) をつくった。英国の政策に反対したマラヤ共産党は、戦争中から培って来た軍勢力を以て、山中のジャングルに入って反英闘争を始めた。マラヤ共産党は1930年に創立されたもので、黨員は主として華人で、思想的には毛沢東思想とゲリラ戦争の勝利を信ずるものであった。しかも、戦後の時期は中国大陆では中共の優勢は明らかで、大陸制覇も近づいていた。英国はこのマラヤ共産党——馬共——の鎮圧のために長い年月を要した。馬共の叛乱は、結果としてマレー人の華人に対する不信を定着させることになり、その後の政治面で華人に諸種の不利をもたらすことになった。

華人は従前華僑という名で知られて来た。僑とは祖国を離れて異国に假寓する意味があり、華僑とは在外中国国民のことである。マラヤが独立し、華僑がこの国で公民権を得ることになれば、華僑の名称は不適當となる。そこで華僑

は僑の字を捨てて華人と称するようになった。華人とはこの地に骨を埋める覚悟を決めた中国系市民の心意気を示す表現である。本論文では時期の前後を問わず特に必要のない限り、華人の名称で統一した。

英政府や英軍の数年にわたる軍事的努力を経て、1957年8月英連邦内の独立国としてマラヤ連邦の独立が英国によって承認された。戦後12年目のことである。戦後のマラヤでは、反植民地主義の闘争をしたのは土着人ではなく、移民の華人であり、独立のために血を流したのは英軍であった。この状態はベトナムやインドネシアの独立戦争に比べても異例である。したがって、独立後もマラヤと旧宗主国英国の関係は良好である。

1963年9月、マラヤ、シンガポール、サバ、サラワクなど旧英領を統合してマレーシア連邦が成立した。ところが1965年8月9日、シンガポールはこの連邦から離脱し英連邦内の独立国となった。マレーシアがシンガポールの離脱を認めた理由はいいろいろあろうが、華人人口の大きいシンガポールをはずすことによって、マレーシアの種族別人口の比率で土着人が優位になれることを期待したのが一つの理由であることは間違いない。

マレー地区はこのように二国家になったが、それは1965年以降のことである。したがってこの地区の華人の歴史や文化を検討する場合も、1965年までは未分化であるので、今日の問題について論ずる場合を除いては、一つのものとして扱うことができる。現在、この二国家に住む華人の間の社会関係は緊密である。

§2 マレー地区と華人のつながり

マレー地区——或は南洋——と漢民族の間の交流の歴史は古く、《漢書》、《史記》にも交流を暗示する部分があり、《淮南子》は秦の嶺南出兵の理由を“越の犀角、象齒、翡翠、珠璣を利するため”と述べている。また漢の武帝も国境を印度支那の順化付近まで進めるなど、漢民族の南進には若干の記録がある。

マレー半島では盤盤国が宋——南北朝時代——の元嘉年間(424—453)に中国に朝貢した記録《梁書》がある。盤盤国はシャム湾岸のPUMPINであろうといわれる。また《梁書》には、丹丹国と狼牙脩国が中国に入貢したとある。唐代には箇羅——クラまたはパタニ——が中国船の寄港地として繁栄した。《諸番志》、《島夷志略》、《明史》、《瀛涯勝覽》などにはマレー半島のジョホール、マラッカ、トレンガヌ、ケラントン、パハン等々の国が中国と関係をもったと記されている。成田節男はその著《華僑史》⁽³⁾の中で、中国とマレー半島の交通史を次の三大時期に分けた。

第一期：マラッカ王国建国以前（南北朝——明初）

第二期：マラッカ王国隆盛時代（明初1405——清中葉1819）

第三期：シンガポール建設時代（清中葉1819——現代）

ここにいう現代とは第二次大戦前のことであるから、これを「1941」とおきかえてもよからう。そうすれば、第四期として“第二次大戦から現在まで”（1942～現代）を加えることができる。

第一期の時代における南海の中心は扶南——カンボジャ——、室利仏逝(シユリービジャヤ)——スマトラ——、マジャパイト王国——ジャワ——にあり、マレー諸国の地位は高くなかった。第二期に入り、マラッカ王国が出現すると重要度が増した。マラッカについては《明史》の《満刺加伝》で紹介されている。明はマラッカとの交通を求め、使節を派遣して永楽3年(1405)マラッカの首長を満刺加国王に封じた。当時のマラッカは所謂小型家産制国家⁽⁴⁾の成熟段階にあったものと思われる。マラッカ国王は永楽9年(1411)明に朝貢した。マラッカはイスラム教国ではあるが、明と結ぶことにより、暹羅の侵入を防ぎ、周辺に対する支配力を強め、繁栄強盛に向った。しかし《満刺加伝》はポルトガル人のマラッカ占領の時を以て記述を終えている。当時かなりの数の華人がこの地

に居留していたのは確実で、マレー半島に僑居した華人の記録に残る歴史はおおよそ 600 年を遡ることができる。

1511年、マラッカはポルトガル人の襲撃を受けて滅亡した。これでマラッカの中国に対する従属関係は絶えたが、華人は依然として僑居を続けた。華人の海外渡航居留の歴史は秦始皇以前まで遡るといわれるが、明の永楽年間を除いては殆んど海外渡航が禁止——海禁——されていた。だから海外に流出した華人は法を犯し、分に安んぜざる無頼の徒、天朝の棄民とされていたにもかかわらず、その数は時とともに増える一方であった。

マラッカはポルトガルの東洋貿易の基地であり、華人はこの港のために必要な存在であった。マラッカは明末（1440）オランダに占領されたが、オランダの貿易の中心地がバタビヤに移るにつれて衰えはじめた。次いで1795年マラッカは英人の手に移ったが、英人も活動の基地をシンガポールに移したので、マラッカ華人の主力もシンガポールに移った。

マラッカの華人が建立した寺院青雲亭は、マレー最古の華人寺廟である。1845年建立の碑文には青雲亭の創立年代を癸丑年と刻してある。これは清の康熙12年(1673)か明の萬曆41年（1613）かで論争があったが、他の客観条件を加味して考えるならば、1673年が妥当であろうといわれている⁽⁶⁾。この時期は正にマラッカの隆盛時代であるが、青雲亭は釈迦と観音を祀り、媽祖、協王大帝、関帝から韋駄天、十八羅漢、加藍菩薩まで祀っており、規模が大きく、建築から仏像に至るまで美術的水準も高い。これらの規模と水準から見て、往年この地には極めて多数の華人が住み、しかも高度の中国文化を移植保持したものと推定される。現在もマラッカは最も美しい華人街のある町で、華人商店街独特のアーケード方式の建築は今日でもマラッカ式建築物と称され、華僑文化の象徴となっている。マラッカには古い時代からの華僑の累代子孫が居り、男子をババ——峇峇——、婦人をニョンニャ——娘惹——という。この集団は言語

的にはマレー化し、思想意識は殆んど華人性を失っているが、習俗のみは強く華人の伝統を守っている。長年の間に現地と同化した華人の姿がどんなものかを見て、後からやって来た華人——新客——にはそれなりの評価と感慨があるだろう。それを肯定するか否定するかで、華人の生活理念はかなり幅をもつことになる。因みに今日のシンガポールやマレーシアの華人最高指導層の多くはババ出身者である。

シンガポールに英人が来たのは、1819年東印度会社のスタンフォード・ラッフルズがジョホール王から6万ドルでこの島を買いとった時からであるが、この地の華人の繁栄も同時に始まった。最初の年、同市の人口は150人で、別に華人の漁夫30人がいた⁽⁷⁾。それが1821年にはマレー人2,851人、華人1,159人、インド人132人、欧人29人、その他556人に増え、1836年には総人口29,984人、その内華人13,749人になった。1833年広州で発行された華字紙の鼻祖《東西洋考毎月統記伝》は1836年にシンガポールに移って発行を続けた⁽⁷⁾。シンガポール市民の中、欧人は大部分が商人、店主、商館代理人、華人は職工、農業者、小売商、マレー人は主として漁師か材木切り出し人夫、ブギス人は商業であるが、華人婦人の渡来は全くなかった⁽⁸⁾。華人の人口が急増したのは19世紀から20世紀にかけて、錫とゴムの生産が増えてからのことであるが、この時期に渡来した華人——新客——はババと異り中国の故山への愛着があり、出稼ぎ意識、一旗挙げる意識があった。

シンガポールの開港に先立って、英人のペナン占領があった。英人はケダ王を半ば騙して1786年ペナンを領有したが、これに奔走したのはフランシス・ライトである。ライトがはじめて上陸したときペナンの人口はマレー人と華人を併せて58人であった⁽⁹⁾。その後1788年には人口1,000人、華人は400人と増え続けた。前記《華僑史》では Braddel Statistics から引用し次の如き人口統計が示されている。

成田節男は1818年から1842まで24年間の増え方が少ないのはシンガポール開港の影響である

年次	1818	1830	1842	1851	1860	1937
華僑	7,858	8,963	9,715	15,457	28,018	150,798
マレー	12,190	11,943	18,442	16,570	18,887	40,542
総人口	35,006	33,959	40,499	43,143	59,956	230,500

と述べている。ペナンはその後活気ある貿易港にならなかったが、治安や環境が良いのでマラッカと共に華人富豪の隠居所、有事の際の避難所として、また華人文化の中心地として栄えた。

上述の経緯からマラッカ、ペナンとシンガポールはマレー半島での華人の経済、社会、文化、教育等の面で中心的な機能をもつ都市となった。英人もこの三つの土地を海峡植民地として直轄した。

清末、外圧に抗しかねた清朝が海禁を解き、英領マレー植民地が多数の華人を招いたのでこの地域の華人は一挙に増えて、ババの集団と新客の二層の華人が存在した。新客と雖も、その歴史は百年を起え新たな累代後裔を生じているが、こちらの方の中国人性はかなり強く保たれている。しかし、1949年中国が共産党支配の国になり、交流が堵絶したことや、この地が独立国となり華人もこの国の公民になったので、新客も殆んどがこの国に永住する決意をした。当初出稼ぎ時代の華人の意識形態は落葉帰根であったが、永住を決意してからは落地生根になったのである。華人の子孫はババ新客を問わず華裔とか僑生ということがある。

§3 華人の集団労働の時代

マレーシア——シンガポールも含めて——の華人には古い累代華裔と19世紀末葉以来の新客の子孫の二層があるが、後者の方が圧倒的に多い。後者が短時間に激増したのはこの時期にマレーのゴムと錫の産業が急成長し、また英国人が良質の労働力として華人を評価し積極的に招いたからである。

マレー半島で最初に錫を掘り始めたのは華人である。1511年ポルトガル人がマラッカを占領したとき、華人が錫を掘っていたといわれるか

らその歴史は古い¹⁰⁰。その当時土着人は、土中にあるものは神のものだという理由で手をつけなかった。しかし、マレーの錫鉱開発が本格化するのには英人がマレーに進出して以後のことである。

錫を多く産したのはペラク、スランゴール、パハン、スンビランの諸州である。鉱地で働く労働者やその上に立つ華人の多くは、中国の伝統的な結社——例えば天地会——に属し、諸帮派¹⁰¹は互いに利権や勢力を争った。そもそも華人は本国政府の保護を得られずに外国の主権下に生活するので、自己防衛の手段として何らかの自治と互助の組織をつくる必要があった。その組織は同郷団体または秘密結社で、或はこの二つを兼ねたものである。英人の勢威がマレー半島の内部に達しなかった頃、例えばペラク州のラルート地方やスランゴールのクアラルンプル地方では、華人は錫鉱の事業を確立し、土侯は鉱業からの税金を最大の収入源としていた。華人結社の大きなものには海山と義興があり、彼らは錫の生産にかかわる他に労働者の生活や娯楽に関与し、賭博場まで経営した。両派は対立競合していたがラルートでの賭場荒し事件から激しい対立闘争に入り、ついに英国の海峡植民地総督の武力介入を招き、1874年両派の首領、ペラク諸土侯と英国の間でパンコール条約を締結するに至った。これを機に両派の野戦部隊は武装解除された上、ペラクそのものも英国の保護国となってしまった。華人勢力の存在や内部闘争が該地の政情や国際関係に影響を与えたわけで、華人勢力の大きさがよくわかる。彼ら華人は武力闘争もしたが同時にマレーの錫鉱業の発展にも大きく寄与したわけで、錫鉱の関連事業として森林伐採、道路橋樑の建設、鉄道、水道、埠頭、役所の建設、煉瓦製造、炭焼等々最も苦難に充ちた仕事で華人の手にならぬものはなかった。

華人の持つ技術的能力は商業的能力とともに評価せられるべきであろう。華人をマレーに誘引した第二の理由にゴム栽培がある。ゴム園労働者の数では華人よりもインド人の方が多い

が、華人労働者は手先が器用なためゴム園でも歓迎された。マレーのゴム栽培は1877年に始まるが、事業化したのは1895年といわれる。その利益率が高いのでこの事業に参入した華人は少なくないし、そこに備われる華人もいた。華人ゴム園は大型エステートは少なく小型のものが多く、1921年にはマレー全体のゴム園の四分の一が華人経営で、1928年には三分の一に達した⁴⁰。

この他華人は果物、稲、野菜をはじめ経済作物農業にも一定の貢献をした。

華人がマレー半島で発展し得たもう一つの理由として、英人が華人の資質を高く評価し、自由主義政策の下で、積極的に華人の渡来を歓迎し、その為に便宜を供与したことが挙げられる。このような華人歓迎策は旧仏印、旧蘭印と対象的である。

現在マレーシアの複合社会を構成する三大種族は、典型的なモザイク社会をつくり出し、特にマレー人と華人が突出して、自己の行動様式、文化、価値観を堅持し、同化せず、融合せず、ただ併存している。斯かる複合社会をもたらした原因は英国の伝統的な分割支配にある。英人はマレー土着人に対しては、スルタンを通じて支配し、土着人の生活圏を破壊せず、自給自足的な土侯支配制度を温存した。また、インド人はゴム栽培のエステートの中で別個に暮した。錫の華人、ゴムの印度人、自給自足のマレー人は相互の交流は不要で三者は英人の分割支配を受けた。インド人はその数が全人口の9%前後で華人ほど多くないこと、歴史的にマレー人はヒンドゥー文化の影響を受けて居り親近感があることなどから、マレー人との対立摩擦は少ないが、マレー人と華人の間は簡単ではない。マレー人には土着人としての権利意識があり、イスラム文化による明白なアイデンティティをもっている。華人は少なからざる人数、伝統的な中華思想、植民地時代に経験した地位、自己の文化への自信などがあって自己主張をする。独立後マレー土着人が民族意識の昂揚を求めて、文化事業や教育に力をいれるのに対し、

華人も自己の一体感を守るための努力をしようとするのは自然である。

さてここで話を再び南渡の初期にもどそう。英人によって主として錫鉱労働者として歓迎された華人は、自己資金による自由渡来者は少なく、大部分は契約労働者 (Contact Laborer) や借貸券制度 (Credit System) による労働者が主であった。その実態は法律的には奴隷ではないというだけで、前借金にしばられ、或は誘拐と大差ない扱いで、監禁部屋におかれたような状態で連れて来られた者も多かった。奴隷貿易が禁止されたあと、それに代るものとして苦力貿易という非人道的な事業が世界的規模で行なわれたのは周知の事実であるが、その経路の一つに南洋方面の航路があった。マレーの華人社会では、この労働者を估俚 (Kuli) 估俚工、估俚卡などと呼んだ。彼らは一定の集団に属して、中国を離れ、マレーに上陸し、錫鉱場に入り、飯場に収容された。飯場と作業場を併せて芭場ということがある。彼らは自由労働者というには程遠いものであり、彼らを支配する特殊な組織的な団体があった。この団体は実際は秘密結社又はそれに准ずるものである。これについては研究報告もあるが、これを形象化して描いた文学作品も参考になる。ジャワに住む華人作家黄東平 (Ooi Tong Pin) の《赤道綫上》、《七洲洋外》《老華工》などは一種の資料性をもつ傑作である。馬華作家方北方の《頭家門下》《樹大根深》も華人生活史を描いた成功作である。これらの作品の中、黄東平は罌、たこべや、白人、船旅、飯場、虐待などを描出して余すところがない。

では中国の労働者——農民、漁民、貧民——はなぜ「背井離郷」といわれる如く故郷を捨て、未知の南洋に行くのか。田農⁴¹はその著《砂撈越華族社会結構与形態》⁴²で華人出国の理由を次の如く報告している。

南洋移民出国の主因

類別	件数	百分率%
1. 経済圧迫 (貧困)	633	69.95
2. 南洋に關係者あり	176	19.45

3. 天災により脱出	31	3.43
4. 事業発展を求めて	26	2.87
5. 事件を起したため	17	1.88
6. 治安の不良を恐れて	7	0.77
7. 家庭の不和から	7	0.77
8. その他	8	0.88
合 計	905	100%

上記の中否定的要因は1・3・5・6・7であり合計76.81%に達する。但し、同じく貧困な場合でも、敢然として出国して事態の好転を図ろうとする場合、これを肯定的要因⁹⁰と解してもよいので、この表の解釈も簡単ではないが、南渡した華人は資質において勇敢、積極的、健康的であった人々であろうと思われる。総じていえば、華人は百年にわたる歳月、三四世代にわたる期間に、成功裡に華人社会を形成したのである。

出国から現地での生活まで、華人が属した団体は本国の省、府、県、鎮、郷など郷土の地縁関係を基礎にしたものである。この種の閉鎖的な地縁団体社会は同時に血縁観念を伴うものである。この地縁と血縁を証明する物質的基礎は方言である。それで地縁集団のことを方言集団と称することもある。今日でも特定の方言の話せることを入会の条件に規定している同郷団体がある。

華人労働者は生活と仕事のすべてにわたって集団生活の中に在ったが、そこで英人など経営者の委託を受け労働者を管理し、英人との交渉を独占する支配的組織が現れる。この種の組織の中には単に一つの生産現場に止まらず、地域乃至は広域社会に君臨する上部組織にまで成長したものもある。この組織は他の同類組織と時には連係し時には対立競合するが対立の側面が強まれば、組織は暴力的機能を持たねばならない。その結果として中国の伝統的秘結社がその組織の当事者となるのが最も相応しいことになる。マレーに渡航した労働者を軸とする華人社会、中国本土の郷土を単位として集つた、奇型的な凝集体であり、中国の故郷の出先きであった。華人はこの組織の中に身を置き故郷に

送金し、小金をためて故郷に錦を飾ることを目的としてコソコソと働いた。組織は華人の生老病死のすべての面倒を見だし、集団は必らず大小の寺廟を建立経営し、精神の帰一する所を用意した。南洋華人は裸一貫で国を出た者が多く、危険や困難、病魔や災難は本土よりも多い可能性があったから、宗教信仰心もより一層高まるかも知れない。一般に南洋華人は信心深いようである。南洋華人の意識形態は中国本土と同様に封建思想を受け入れ、同時に仏教、道教はじめ諸宗教信仰心に支えられ、懸命に働く現実主義者といえる。彼等はマレー土着人やインド人と接触する必要性も可能性もなく、只々自己の集団の頭首の指揮に従い、伝統的慣習を遵守し、故郷を忘れず、家人のために働けば萬事大吉であった。華人社会にとっての外部とは英人であり、それとの関係が良好に保たれて居れば、華人の生活は安泰だった。英人も華人を重用した。パンコール条約以降は、英国の植民地支配態勢は強化され、華人組織の暴力性は否定され、それらは同郷会館などの公然団体に改められ、首領たちは会長や理事長になり、人によっては英国当局からカピタン——甲必丹——の称号を与えられ、名誉と利権を手にした。パンコール条約は英人と華人の関係をより一層安定させた。

§4 集団的生活から自由な個人生活 への変化

1930年代の世界的経済恐慌は、ゴム・錫の市場に影響を及ぼし、マレーの多くのゴム園や錫鉱場が倒産し閉鎖された。国際的市場におけるこの二商品の投機性は特に著しかったといわれる。英国植民地の寛容で自由な体制の下で安定した生活を維持して来た華人は、ここではじめて失業と離散を経験した。不況の中で英人も伝統的な植民地経済支配を維持する余裕はなくなった。そこで植民地の法体系を改め、失業華人の自由な転職と自立を認め、新しい労働者の入国を制限する一方で女子・子供の渡来を許容することにした。これまで男子集団の中でのみ就

業し得た華人労働者は、自力更生して自由に活路を求められるようになった。この法令を「1933年外国人条例——THE ALIENS ORDINANCE OF 1933」という。新しい法律は以前に比して華人労働者の人権を少々認めたものであるが、これは単に経済不況だけの理由に基づくものではなく、中国本土における労働運動の影響にもよるものであり、中国本土でも特に南洋華人と縁の深い広東省が労働運動の発源地であったことが響いているとする説がある¹⁰。中国国内の労働運動や思想運動が新客の多いマレー地区華人に影響を与えたとする見方には軽視できない意味がある。1933年の外国人条例は、主として華人労働者を対象に制定されたものであるが、上記の思想運動とのかかわりは一般の知識的華人の意識にも一定の影響があったと見てよからう。そうすれば、シンガポールの文学者方修¹¹が“マレーの華文文学——馬華文学——は新民主主義的な文学だ”といったのもうなずけるわけである。

この法令のため、華人を集団の中に閉じこめる枠がなくなり、労働者は自分の上に君臨して来たいろいろな名目の上層支配者のもとを離れ、都市や農村で個人の才覚や技能により、商工業や一定の制限下の農業に従事できるようになった。この条例以前にも若干の自由商業華人は居ないことはなかったが、これを機会に華人社会には大変化が起り、個人の間の交際面は急速に拡がり、女子の就業者が急増し、家庭を持つ者も増加した。これにより華人社会は質的な変化を起し、労働者、商工業者、サービス業者、店員、職工、教師、自由業者などを含む自己完結的な商業民社会を形成した。古い言葉で言えば士農工商が揃ったのである。結社や団体——社団——も従来の閉鎖的な地縁、血縁によるものだけでなく、業界全体の発展や便宜を図る同業公会——業縁団体——が増加し、また従来の地縁団体も視野を拡げて上位の社団や他の近縁社団と連合するものも現れた。華人全体の商工業団体をまとめる総商会や、文化事業に重点を置く、華人団結の象徴としての中華大会堂

が各地に成立した。

この段階の華人の精神は自由主義経済制度の下における、商業を主とする海外華僑の旺盛な向上心に満ちていた。

華人社会の意識を昂揚させた外的な要因として、30年代の本土の内戦と日本の中国侵略がある。民族の団結一致と積極抗日を求める与論は華人のアイデンティティ強化に役立った。民族精神の昂揚に先導的役割を果たしたのは、知識分子、教師、学生、文学者、新聞記者、編集者などであった。東南アジアの各地に華人が居たが、マレー地区華人の抗日意識は特に強かった。それはこの地区は他の地区と異り一世——新客——の方が二世以上——僑生——よりも多かったこと、入国が比較的に自由だったので本土からの知識人流亡者の入国が多かったことに在因する。国内内戦により逃れて来た知識分子が思想的に左翼に近いのは当然だが彼らの多くは現地の言論界で一定の役割を果たした。しかし、商業社会である華人社会全体の傾向が自由主義であり、全体主義でないのは自然なことであったし、英当局の支配は華人の思想政治活動にも一定の枠をはめていた。華人社会は愛国抗日の運動を通じて、民族一体感の昂揚を見せた結果、それに対応して文化、文学方面でも志気があがった。南来知識分子の中でも、郁達夫は最も有名である。

1941年12月に第二次大戦が起り、マレーの英軍は大敗を喫し、それから大戦の終るまで3年8ヶ月の間、マレーは日本の軍政支配の下におかれた。華人の社团はすべて徹底的に鎮圧され、活動を停止したが一部少数の華人は中国国民政府と英軍の指導の下に136部隊を編成し、山中のジャングルなどで抗戦活動を行なった¹²。また馬共も抗日ゲリラを組織して抗日活動をした。この抗日ゲリラの消長が、戦後において華人の政治的地位のあり方に意料外の影響を与えた。

第二次大戦中のマレー華人の立場は、中国本土被占領地域の中国住民と似たものがあつた。日本軍政の民族政策は多くの欠点と暗黒面もあ

ったが、結果的には諸民族のアイデンティティを刺戟するところがあり、戦後のマレーの民族問題に間接的影響を与えたといわれる。

本章で述べた時期において華人は古い結社支配の集団型生活から、個人の独立自主の生活に転換し、それが原因で自己完結的な華人社会を形成し、世界に聞える華僑社会をつくり上げた。時を同じくして起った中国の内戦や日本の中国侵略が、華人のアイデンティティ形成を促進し、民族精神、中華思想を顕現することになった。華人にとっては激動的であり且つ肯定的に評価さるべき時代であったといえよう。華人は富を蓄積すると共に精神的に成長し自信をつけたのである。

§5 第二次大戦後のマレーシア華人

1945年日本が敗れマレーから撤退した後、この地域における英人と三大民族の関係は戦前の状態には復原しなかった。

日本の敗戦直後、マレー半島の一部では、英軍を迎えるべく華人の武装ゲリラ部隊が山中のジャングルから出て来た。一般華人も、今次大戦で勝利を得たのは中国を含む連合国であり、華人はこの戦争の主要な勝利者の一員であると考えた。シンガポールの《星洲日報・総匯報連合版》の戦後第一号には「中華民國三十四年九月八日」の日付があり、“中英米ソの包囲の下に、日本が降服した”と伝え、“吾が華僑の各界は盛大な祝賀を準備している”と書き、蔣介石委員長の写真が紙面の中央にのせている。この日付が民国年号をやめ、西暦年号に統一されたのは1950年以後で、即ち中国大陆において北京政権が樹立された後のことになる。この年号などは華人の帰属意識の所在を示すものである。

3年8ヶ月の日本の軍政時代、華人の上層階層は華人社会への指導力を低下させており、戦争直後の混乱期の華人社会の指導的権威は大体において左右両派の抗日ゲリラの領袖の方に移っていたといわれる。また中国本土の国共両党の武力闘争は日益しに激しさを加えており、この情勢の下で、マレーでは馬共もある種の権威

を持っていた。

戦後、英軍が華人のゲリラ部隊の武装解除をしたとき、国民党系の[136部隊はこれをうけ容れたが、馬共ゲリラはこれを拒否して、再び山中に戻り、こんどは反植民地主義闘争や独立獲得のための闘争をはじめた。戦後の経済不安定、社会不安、ストの頻発の中で、英軍はマラヤ軍団と共に長期の馬共討伐作戦に入った。馬共は主として華人から成るので馬共の存在はマレー人の華人に対する不信と警戒心を固定し、その結果、華人は不利な地位に立った。

1948年から1953年まで馬共討伐のため緊急状態法が施かれたが、この時期はマラヤが独立するための準備期間で、馬共討伐と同時に憲法制定をはじめ、さまざまな政治的な動きがあったが、英人とマレー土着人が独立準備の協議を進める間、華人は殆んど参与の機会もなかった。一方、馬共討伐の必要上、ジャングルとの境界に位置する町や村落の華人はすべて移動させられ、別につくられた新村に収容された。これが華人への新たな困難をもたらした。この状態を見て華人の救済を目的とする華人政党MCA——馬華公会——が成立した。MCAの指導者は主としてババ又は累代子孫が多く、英語教育を受け、マレー人や英人とも親密な関係をもつ新しい勢力で、華人社会の指導層は交代し、新しい局面を迎えることになった。これ以後華人社会は伝統的な色が濃い中華思想をもつ社団系指導層とMCA系の指導層の競合の時代に入る。これは華人社会の意識形態の分裂を反映したものに他ならない。複雑で矛盾に満ちた戦後の華人社会で何れが保守的、何れが進歩的と簡単に類別することはできない。MCAはマレー人政党と組んで政府与党の地位を守っているので中華文化を重んずる人々や社団系指導者は野党的な立場に立ちやすい。知識分子の立場は微妙であり、余り明快な意見は求め難いが、言語問題、教育問題で華人の利益闘争の第一線に立つ教員グループは反MCAの傾向が強く、華文作家達も反権力の慣例にもれず、一般に教員グループに同情的であり、華人アイデンティティ

を守る闘争の第一線の責任者を自認している。シンガポールとマレーシアでは状況も条件もちがうが、それでもシンガポール政府文部省政務次長何家良氏は“私たちにとって英語は生活のための道具だが、華語はそれによって自己を知り、自己を取り戻す言語である^⑧。”と述べ、またマレーシアの華人作家伍良之^⑨は、1982年夏筆者に向い“われわれ華文作家はこの多民族社会の中で、自己の尊厳を守るために、華語で作品を創る”と語った。このような発言の中に、この地域の華人知識分子の意識をうかがうことができる。

さて、馬共討伐作戦が進行する間、華人はマレー人から白眼視され、建国の準備作業の場から除外されており、でき上った憲法には華人に不利な点があったが、もう遅かった。1969年5月11日に終わった国会・州議会議員選挙の結果をめぐり、危機感を深めていたマレー人は5月13日華人野党のデモ行進と衝突し、そこから五一三事件が発生した。この流血事件は華人側の損害が多かった^⑩。

事件後、1970年8月30日の国慶日の前夜、元首は「国家原則——RUKUNEGARA」を発表し、マレー土着人の優位とイスラム文化の絶対性を決定づけた。

複合社会では人口が多い方や、権力を握った方が有利な多数派になるが、マレーシアにおけるマレー人と華人の人口の差は次表の如く僅かでありながら、多数派と少数派の力の差は厳然たるものである。(以下何れも1970年の政府人口統計)

マレーシアの民族別人口 (1970)

民 族	人 口	百分比
マレー系	4,886,912	46.8
中国系	3,555,879	34.1
インド系	942,944	9.0
ダヤク族	386,260	3.7
カダザン族	184,512	1.8
その他の土着系	337,395	3.2
その他	145,628	1.4
計	10,439,530	100.0

西マレーシア——半島マレーシア——に限れば次の通りである。

西マレーシアの民族別人口 (1970)

民 族	人 口	百分比
マレー系	4,685,838	53.2
中国系	3,122,350	35.4
インド系	932,629	10.6
その他	69,531	0.8
計	8,810,348	100.0

サバ、サラワクなど東マレーシアでは華人の方が多い。

サバの主要民族別人口 (1970)

民 族	人 口	百分比
カダザン族	184,512	28.2
中国系	139,509	21.4
バジャウ族	77,271	11.8
インドネシア系	39,526	6.1
ムルト族	31,299	4.8
マレー人	18,365	2.8
その他の土着系	125,631	19.2
その他	37,151	5.7
計	653,264	100.0

サラワクの主要民族別人口 (1970)

民 族	人 口	百分比
ダヤク族	386,260	39.6
中国系	294,020	30.1
マレー系	182,709	18.7
メラナウ族	53,234	5.5
その他の土着系	49,960	5.1
その他	9,735	1.0
計	975,918	100.0

華人は少数派なるが故に自己のアイデンティティ確認の運動や自己のルーツをたずねる尋根運動に力をいれるが、華人団結運動の第一の仕事は、まず共通語たる華語——大陸の普通話——の普及運動であり、それにつながる学校教育の内容と学校制度について華人の利益を求める自己主張、華語系大学の設立運動などである。本来金銭第一の商業民社会たる華人社会で

ありながら、今日最も尊重され強い発言権を持つのは学校理事会——董総——と教員組合——教総——の責任者である。このような情勢の中で、華文文学が発展することが期待されたが、現実には華人社会に読書の気風が乏しいこと、次代読者層の育成がうまく行かないこと、換言すれば文学市場の制約の為に困難はあるが、馬華文学の関係者は異常な努力をして、困難の克服は進んでおり、相対的には発展に向っている。

マレー人に対して、政治的な対抗手段を見出せない華人は、馬華文学者、社団指導者、学校経営者、教員の何れを問わず、専門領域でそれぞれが努力をした。MCAも客観的には華人の権利の為に十分の努力をしたと言って差支えない。社団の多くは従来の如き会員の親睦活動から重点を会員の相互出資による経済活動に転換しつつあるが、総じて言えば華人は、文化の面で自己証明を求めることに最後の期待をおいている者が多い。

しかし、過去の集団労働時代や、戦前の華人社会形成期ならばいざ知らず、今日華人を一つの方向にまとめるエネルギーはない。華人青年の中には、社団の存在を無視するだけでなく、華人にとって有害であると看做す者さえ現れた。マレーシア社会の近代化や、文化政策の下で、華人の意識の根底にあるものは透視できない前途への不安であり、民族の尊厳を認められぬ苦悩である。

1983年8月、マラッカでの実地調査ではババの家を訪れた。この家には先祖から伝わる中国伝統の大きな仏壇、漢字の掛軸、什器等は絢爛たるものであったが、当主は華語を解せず、漢字も読めず、言語的にはマレー語化英語化していた。日常の食住生活や習俗の表面には若干の華人文化が残ってはいるが、精神や意識の中に根付く華人性は全く微弱であった。しかし、マレー政府は彼らも華人と看做して居り、一般華人と区別していない。華人としての自己証明を失い、自己の何者たるかを見失ったババの姿を見て、一般の華人が自己の未来の運命に

不安を抱くのが理解された。現在、マレーシア各地のババは、自己のアイデンティティを回復すべく、華語を学習し、華人社会へ復帰する動きを見せている。それは、たとえ華人性を失って、言語的にマレー化しても、実生活の中では何も利益がなく、華人社会と断絶する不利益と不安を認識し始めたからである。

華人も公民権をもつマレーシア国民ではあるが、ババの実体を眼の前にしては、華人はこの複合社会の中で華人のアイデンティティをそこなわずに存続発展するには如何に処して行くべきかが、華人にとって甚だ現実的な問題となっている。馬華文学者はこの方面で大な責任を負わされている。

§6 馬華文学について鄭子瑜の問題提起

鄭子瑜⁴⁴⁾は次のように述べた⁴⁵⁾。“ハン・スーイン女士⁴⁶⁾が1960年9月12日に発表した「馬華文芸の発展」と題する講演で、1912年（民国元年）を馬華文学発展の第一段階と規定した。これは李汝琳⁴⁷⁾の見解——李は馬華文芸の起源を1931年とし、九一八の満洲事変がマラヤ華人の創作の情熱をかきたてたと言っている——より20年も前にさかのぼる。李が言うところの馬華文芸とは、新文芸のことであるから、1931年から始まったと言っているのであろう。しかし、1919年の五四運動から1925年——1927年の北伐革命にかけての時期に馬華新文芸が誕生したと考えるのが正しく、1931年までおくらせて考える必要はない。勿論当時の馬華文芸は成熟してはいなかったけれども文学史の観点から見れば、その存在は否定できない。ハン・スーイン女士の馬華文学1912年起源説は中国の新文学運動や新旧文学の交替の歴史を無視した考え方と言える。女士の言う馬華文学は単に新文学を指すのか、それとも旧文学を含むのであろうか。もしも新文学を指しているのであれば、その当時中国にはまだ新文学運動は生れて居らず、どうして馬華の新文学があり得ようか。1912年に馬華新文学が先きに存在し、その後に1917年または1919年に至って中国新文学に影響を与える

ということは殆んど不可能なことだ。もしも旧文学まで含むのだとすれば、馬華文学の歴史はもっとさかのぼるべきで、1912年がその起源の年だとは言えない。”

ハン・スーイン女士が1912年起源説を唱えた根拠がどこにあるのか分らないが、鄭氏の“馬華新文学が先にあって、それが中国新文学に影響を与えるなどということはありません”と断定することにも問題がありはしまいか。馬華新文学が先きにあって、それとは別個に中国新文学が起ったとしても不都合はないからである。思うに、清末のマレー華人はかなり進歩的且つ愛国的であった。清末の政治改革運動が盛なりし時代、マレー地域の華人はその運動と無縁ではなかったし、民国革命の実行に当っては、孫中山の興中会、同盟会、国民党の運動に対しては物心両面から支援を与えた実績がある。中国本土で中世的封建的支配者の下で暮した中国人と異り、合理的で自由主義的な英人社会を身近かに見た進歩的なマレー華人の意識が中国本土の知識分子よりも遅れていなければならない理由はない。中国の五四運動がマレーの華文文壇に影響を及ぼしたのは事実だろうが、それに先立って馬華文壇の一部にも自己覚醒の動きがあったとしてもおかしくはない。

さて鄭子瑜はハン・スーインの見解を批判しつつ馬華文学の内容と定義について次のような興味ある検討をしている。“馬華文学に旧文学を含むとすれば、その歴史はどの時代までさかのぼればよいのか。これに答えるにはまず馬華文学の定義から考えるべきだ。ハン・スーイン女士は「馬華文学の定義は、中国語で書かれ、情感と描写においてマラヤの内容を有する文学作品、例えば詩歌、戯劇、小説および散文と規定すべきだ」としているが、この主張は正しい。次に女士は「それは望郷の念を抱き、中国を偲び、純粹に中国の英雄、風物や土地のことがらを描くばかりで、結局マラヤと何のかかわりもないような作品は含まない」と規定した。これにも私は大体同意する。しかしこれまでの馬華作家たちは、マラヤのことを書いてはいる

が、同時に故郷をなつかしみ、中国の追憶をすることもありがちである。しかし私はそうであっても馬華文学といって差支えないと思う。なぜならばこれとて時代と現実を反映した作品にちがいないからである。それが純粹な馬華文学ではないと言われるならば、仕方のないことである。この地域はこれまで長い間植民地主義の支配の下におかれ、自治や独立を得たのはこの二三年のことである。華人がマラヤに渡来したのははるか昔のことだが、大部分の者は外から来たよそ者を以て自任して来た。彼らは他人の軒下を借りて住み、さまざまな不公平な扱いを受けて来たので、故郷をなつかしみ、祖国を思う心も格別に強かったわけである。しかし、彼らはこの土地に生れ、この土地で暮し、この土地で生を終る気持で、マラヤの各民族の人と切っても切れない因縁を結んだので、マラヤに対して愛情を生ずるに至った。彼らの中の少数ながら詩文の才に長けた者は、マラヤをうたい、マラヤを描き、ハン・スーインが述べたようにマラヤの感情の内容を具えた作品を作ったわけであるが、何と言おうと、どうしてもマラヤの主人を以て任ずる勇氣はなかった。何故ならば、主人公のように振舞うことは植民地主義と衝突することで、それは許されなかった。そのような状況の下で、彼らに対して望郷の念を持つてはいけない、祖国を思うなといってもそれは無理な相談だし、それはまた歴史の事実にも反することだ。それ故に、植民地時代の馬華文芸に僞民意識があったとしても不思議はない”鄭子瑜のこの切々たる表白は華人の心情を率直に吐露したものとして、人の胸を打つものがある。華人社会を研究する上で華人の真情を知ることが重要であるが、痛切に核心をついた鄭子瑜の所説は、虚飾を捨て去ったほんねの発言であり、まことに華人への共感をそそるものといわねばならない。

鄭子瑜は更に言う、“第二次大戦後、独立自主の声が高まるにつれ、馬華文芸もこの現実と結びつき、1948年「馬華文芸の独立性」のスロ

ーガンが提起され、続いて馬華文芸と僑民文芸の論争が起った。その結果として、馬華文芸の方向が定まり、マラヤ的な意識が定着し、マラヤ華人はこの国を構成する一員になり、マラヤが自己の故郷となったのだから、馬華文芸はこの土地の社会生活を反映すべきであり、中国文芸とは異なるべきだということもきまった。”

次に馬華文学の起源は何時かの問題について、鄭子瑜は明代から清代にかけての、中国文人の手になるマラヤに題材を求めた遊記、紀行文、抒情文、評論を紹介した。例えば清末1881年から9年在任したシンガポール領事——1907年に総領事として再任——の左秉隆、1891年から3年在任した総領事黄公度、1901年から10年在任した領事楊雲史らの詩作を紹介しているが、これらの作品も海外に住む立場から故国を偲ぶ態度は免れないとしている。しかし、鄭子瑜は、「馬華文学」もさかのぼればかなり旧時までさかのぼれる点を言いたいのである。また馬華旧文学が詩作に偏っているのは戯曲や小説は腰をおちつけて長時間の構想と作業が必要だが、紀行や抒情には散文と詩歌が適しているからだと言っている。

鄭子瑜は、こんな旧文学を何故馬華文学の中に含めようとするのかと自問し、それは歴史の事実だからだと答え、「僑民意識」のかけらでもあれば馬華文学と言えないという厳密な分類のしかたを批判し、そんな厳密さを要求するならば馬華文学は、戦後独立して以後二三年にして現れたもので、その歴史は10年そこそこしかない。僑民意識をもつ文学も馬華文学から排除すべきではないと述べている。最後に鄭子瑜は“現在シンガポール・マラヤは自治と独立を獲得し、華人も多くが公民権を得た。皆マラヤという国を構成する一員になり、マラヤを自分の故郷とすることになった。新しい時代の馬華作家たるものは、この土地での居候的な気分や、不平不満のみを書いたり、故国にのみ顔を向けているような作品は書くべきではない。新しい時代の作家は、祖国マラヤを熱愛し、マラヤの人民を熱愛し、心を合わせて各民族と融和し、

マラヤの美しい未来のために作品を書こう。”と結んでいる。

鄭子瑜の所説は全般的に率直真摯で、独立直後の華人の虚飾なき心情が流露している。また馬華旧文学について若干触れているのは馬華新文学の発端とのつながりを知るために参考となる。氏が最後に強調した部分は、多分当時の一つの傾向に対する警告であったのであろう。

馬華文学についての検討は後章に譲るが、余り系統的でもない鄭子瑜の主張はその後の理論研究の成果とはちがった参考事項を提供している。後章以下の所論はこの鄭子瑜の所説と重ねると更にわかりやすいと思う。

§7 馬華文学の性格

今日の馬華文学は、マレーシアの華文文学——文字通りの馬華文学——とシンガポールの華文文学——新華文学——に分れており、既に若干の異質性を呈しているが、1965年前は同一の範疇に属していた。新華文学の現況については別に論ずることにして、本論文では、マレーの華文文学を一括して対象として検討した。

既に述べたように、マレー地区の華人のあり方、華人社会の意識は時代とともに大きく変化した。従って、華人の生活や時代の精神を反映する華文文学も、時とともに変っていった。中国人性を重視するか、現地住民としての立場を重視するか、革命活動の一環として文学を眺めるのかどうか等により、馬華文学の理解の仕方は諸々の見解にわかれる。以下において、馬華文学の代表者6氏、方修、苗秀^㉒、方北方^㉓、林明水^㉔、吴天才^㉕、楊松年^㉖の所説を紹介する。この六氏は馬華文学が中国の五四新文化運動の影響の下に誕生したことは共に認めているが、その後の発展についての理解の仕方や、馬華文学の理念、将来の展望についての考え方ではかなりのちがいを見せている。

馬華文学は中国の五四運動の影響を受けて誕生したといわれるが、五四運動の根本思想は反帝国主義、反封建主義であり、政策的には科学と民主主義の擁護である。もっと具体的に言え

ば軍閥、旧礼教への反対、日本・英国など帝国主義への反対である。従って、五四の思想は必然的に文学革命に向い、更に革命文学となり、新民主主義革命の重要な一環となり、さらに毛沢東思想で武装され、社会主義的現実主義文学に発展した。しかし、英国の植民地たるマラヤにおいては、反帝反封建を掲げて、明らかな階級革命の思想を宣伝できないのは当然であった。既述の鄭子瑜もこの間の華人の屈折した心情を述べている。それにもかかわらず、全体的な雰囲気としては、馬華文学が五四運動と精神を共有したのも事実である。馬華作家たちが強調する五四運動と馬華文学の不可分の関係は、いろいろな意味で肯定される。

(1) 方修は“馬華新文学は中国の五四新文化運動の余波を受けて始まったものである。五四運動の内容は科学、民主を尊重し、封建と侵略に反対するものであるが、マラヤ華人の一部知識分子は、この新思潮に影響され、新文学の創作を始めた⁹⁰。”と述べ馬華文学は中国新文学の支流だと見做している。また“馬華新文学は、この地に存在したはこの地域の人民の生活に影響を与える侵略行為、不正義の戦争、植民支配、封建的な政治制度、経済制度、社会形態、意識形態等々に反対する。馬華文学はこの地域の人民の民主改革、民族独立の要求と願望を反映する。……馬華文学は新民主主義的な性格をもつ文学である⁹¹。”と述べている。新民主主義とは労農同盟を基盤にする中国共産党が民族資産階級、小資産階級、農民、労働者階級と統一戦線を組んで反帝、反封建、反官僚資本主義（国民党）の闘争を進める革命運動であり、その遠景として社会主義共産主義を描いていた。而して中国新文学は新民主主義革命の一端を担う革命文学であったから、方修の見方は大体において中国大陆の革命史観、文学史観に近いものと言える。氏の思想はかなり多くの華語系華人⁹²知識分子の琴線に触れるものと見られる。

(2) 苗秀は《馬華文学史稿》⁹³で、発生の当時は“馬華文学の本質は移民文学であり、執筆者の多くは中国本土からの流亡者で、彼らは本

国で革命活動に参加し、そこで失敗して亡命して来たものか、生活のためにはるばる移住して来たものたちである。”と指摘し、更に“彼らは意識的に文芸を宣伝のための武器とし、中国の腐敗やさまざまな不合理な社会現象を暴露し、海外中国人の愛国の熱情を鼓舞し、中国の腐敗した政治とおくれた社会的封建性に対する反対に向わせた。”と述べている。つまり馬華文学といっても、その執筆者の多くは中国から来た人で、その教養は中国的なものであり、文学活動の動機や目的は中国の革命運動にあり、海外中国人の目を本国に向けさせることにあったとしている。苗秀はこのように述べているが、それが新民主主義的性格であるとまでは言わず、移民文学や僑民文学についての説明にとどめている。前出の鄭子瑜の所説と併せると僑民文学のもつ雰囲気は理解しやすい。

(3) 方北方は移民文学の次に来るべき馬華文学の性質について次のように述べている。“馬華文芸は華文を表現の具として用い、マレーシア華人社会を反映した作品のことである。マレーシア文芸とは三大民族——マレー人、華人、インド人——の文化交流を通じてこの人々の生活認識と思想上の要求を反映した作品である。……馬華文学は中国的な僑民文芸から脱して、独自性をもったマレー的な文芸にならなければならない。シンガポール・マレーシアの文芸界は所謂「傾向」の問題について論争し、馬華文学が中国の方に傾向を置き、中国を重視すべきか、マレーの方に傾向を置き、こちらを重視すべきかについて論議した。また一部の人は中国化とマレー化の二つの傾向はマレーの文芸界においては統一できるものだと考えている。”⁹⁴と述べている。

(4) 林明水は“馬華文芸という名詞に就いては、現在多くの人がその様貌を明らかにさせようとして努力しているが、先人の努力により、馬華文芸はとうに僑民文学の添え物の地位から脱却し、ほんとうにマレーシア文学の一環となっている。馬華文芸の作家たちは、それぞれの時代に立場を明らかにして、この土地の人民の

生活、思想、郷土の風物、社会の発展などを多くのちがった角度から映し出している。……これらは、馬華文芸のすぐれた伝統である。この伝統が未来の馬華文学の作品の中で発揚されることは間違いない⁸⁹⁾と述べている。

(5) 吴天才は“マラヤ文学は世界文学の一環であり、馬華文学はマラヤ文学の中の一つの流れである。馬華文学は、マラヤ（シンガポール、ボルネオを含む）地区を主体として出現した新思想、新精神および新意識をもった華文の口語文学である。それが生れたのには二つの原因がある。すなわち1. 中国の五四新文学運動の直接の影響を受けた。2. この土地の華人が、彼らの心情や願望を表現するのにふさわしい文学形式と白話文を求めた。……文学は現実を反映するものである。馬華文学は中国新文学に源を発し、而もそれと同一の言語を用いて創作されるものであるが、それでもやはり両者の間には本質的なちがひがある。何故ならば、馬華新文学はマラヤを主体とし、作品の内容の多くはこの土地の華人の人情習俗、ローカルカラーおよび社会関係を反映し、人民の共通の願望と心情を表現するものだからである。したがって、その後の発展の過程の中で、中国新文学とは異なる自らの道を進むものに転化し、別個の独自のものになった。馬華新文学の任務は、この土地の人民のために奉仕することで、その作品の内容は、華人の生活の真実の状態を反映し、三大民族の団結を促すものであるが、これも馬華新文学の独特性である⁹⁰⁾。”と述べている。

(6) 楊松年は“当時——二十世紀初期——の華人の望郷の意識は極めて強烈であったけれど、現地意識——この土地への帰属感——の深化現象も無視できない。南洋大学のマスコミ専攻の王慷鼎講師の指導の下で、李麒麟が書いた《1923年——1924年のシンガポール南洋商報社説の研究》によれば、1923年9月8日から1924年9月30日までの期間の南洋商報の計107篇の社説を分析した結果、シンガポール・マラヤの意識で書かれたものは30篇で、34.48%を占め、僑民意識で書かれたものは57篇で、65.52%を

占めていることがわかった。次に姚尧伝の《1946年南洋商報社説調査》では、この年の社説65篇の中、現地意識で書かれたものが27篇あり、41%を占め、僑民意識を以て書かれたものは38篇で58%を占めたことが認められた。ここで注目に値する調査結果がある。即ち、《南僑日報》が1947年の上半年24,012人の華人を対象にして調査した結果、次のような二つの注目すべき結果が出た。即ち1. 98.2%がマラヤはマラヤ人民の国家であるべきだと考えた。2. 95.6%の人がシンガポール・マラヤに居住する華人はシンガポール・マラヤの公民になるべきだと考えた。……1937年から1942年にかけて、中国は日本の侵略に直面し、シンガポール・マラヤの華人の中国を想う心情は極めて昂揚したが、その時でさえも、シンガポール・マラヤの華人は現地意識を持つべきだという意見を断乎として主張した人たちがいた。この地域の華人は自分が中国の僑民であることははっきりと知っているが、一方ではシンガポール・マラヤに対する親和感は益々強化されていたのである⁹¹⁾と述べ、更に現地の言論の中には現地への愛着が強く、南洋精神の樹立問題に対して只ならぬ関心を示すものがあったと指摘している。

以上六氏の所説を簡単に検討して見よう。方修は馬華新文学と中国新文学の共通性や近似性を極力強調する立場に立ち、中国新文学が一貫して現実主義から新現実主義の路線を進んだように、馬華新文学も現実主義であったし、将来もそうあるべきだと主張している。方北方も現実主義を擁護しているが、新民主主義的な性格というような言葉は使っていない。

方北方は方修の見解を支持尊重しているが、同時に氏は三大民族の融和とか華人とマレー人の融和と親密な交流の可能性を期待しつつ、その上に新しいマレーシア文芸が築かれるような未来を展望する姿勢を示している。実際には方北方は高踏的な理論よりも、むしろ大衆にわかりやすい小説の創作に力を入れている作家であるが、マレー人文学理論家が、マレー人優先の、ショービニズ的な主張をするときは、先頭に

立って激しい反論をする。

林明水は少々楽観的な見方で、馬華文学がマレーシアの郷土を反映する文学として、マレーシア文学の一環としての地位を得たとしながらも、尚華文作家の今後の努力が必要だとしているのは、やはりすべてがうまく行っているのではないことを示している。

呉天才は世界文学→マラヤ文学→その中の馬華文学という具合に淡々と述べ、馬華文学は要するに華語口語文で書かれたマラヤ文学の一種であると規定し、また馬華文学と五四新文化運動の関係は認めるが、今日では中国新文学とは本質的にちがったものになっている。馬華文文学はマラヤ地区を主体とし、この土地の人民に奉仕し、三大民族の団結を促がす任務があると主張している。呉天才の説によれば、いわゆる五四新文化運動の影響とは口語文形式の採用に重点があるようである。一般に「五四の影響」は鄭子瑜を含めて無条件に肯定されているが影響の実体については更に検討が必要である。最近のシンガポールの若い研究者の中にはこの面を過大に評価せずその後の発展の過程では中国新文学と同質の革命性などはないと主張する人も出ている。

方北方、林明水、呉天才の三氏は、現在マレーシアに居住する公民であり、それぞれに馬華文学運動の責任ある地位にある人たちであるが、三大民族の融和とか、マレーシア全体の文芸を視野に置いて考える点は、シンガポールの三氏とは若干異なるところがあるので注目を惹く。筆者の実地調査によれば、現実のマレーシアでは、ブミプトラ政策、憲法の規定、言語政策、教育政策のもとで、華文文学は相当に不利な環境下にあり、基本的な華語教育すらも十分にはできない状況である。またシンガポールでは、決定的な英語優先政策の下で、華語文化の前途の暗淡を思わせるものがある。馬華文学の前途の検討に当っては、光明の一面とともに否定的、消極的な一面があり、而も簡単に結論を下し得ないところに問題の難しさがある。三大民族の融和と団結を促すためにマレーシアの馬

華文学の定期刊行物には一定量のマレー語作品が原文のまま掲載されて——尤もこれは非マレー語出版物に課せられた義務である——いるし、マレー語文学作品の華語訳文も一定量が載せられて——これは義務ではない——いる。然し華文作品の中にマレー人やインド人が有意的登場人物として現れることは甚だ少ないようである。例えば一部の作品が華人社会を描くとき甚だ生き生きと躍動しているのに比し、他民族との融和を題材にして、他民族を描くとき、とかく類型化する傾向を見せるのは、この種の主題そのものの扱い方の難しさをうかがわせる。諸種の資料や聴き取り調査の内容から見て、馬華作家が民族間の融和を求めているのは確かであるが、現実の華文作品が融和を求めて書かれているのか、それとも対決の場として書かれているのか、筆者が迷うこともないではないが、闘争を通じて融和団結を求めてゆくという、弁証的な思考もあるのだから、性急な結論は下せない。筆者の初歩的な意見としては、融和の為にはマレー語作品と華語作品の対訳をさかんにすること、その方面の人材の充実や出版への便宜供与などが焦眉の急だと考える。

楊松年の所論は甚だ特徴的で、主として南洋華人と本土の中国人との意識形態の距離に着目し、南洋華人の中国郷土への帰属感(認同意識)は時間とともに濃から淡に、逆に現地への帰属意識は淡から濃へと変化していると認め、謂わば南洋的意識——南洋の色彩への同化の度合——をもとに考察しているものであるから、これを「南洋色彩史観」又は「色彩史観」と表現することもできよう。楊松年は華人史は要するに南洋色彩の濃さを強める歴史であり、脱中国の歴史であったから、その意識形態を反映する馬華文化史や文学史も、中国性を薄めつつ、南洋華人の独自性確立に向う過程を反映する記録であるとしている。楊松年の見方には明快な視点があり、独自性を示す上で説得力がある。

方修から楊松年に至る六氏の所論は、華人意識の変遷や多様性を示しているようである。

ところで、これらの所論には多かれ少なか

れ、たてまえとほんねの乖離があるように思えてならない。現実の馬華文学がおかれた境遇はかなりきびしいものである。なおこの六氏の所論に鄭子瑜の所論を重ね合わせると馬華文学の実像は更にはっきりするであろう。

§8 馬華新文学の変化とかたまり

馬華文学が五四運動の直接又は間接の影響を受け、或はそれを強い契機として誕生したことは間違いない。また明代や清末の中国文人がマラヤを描いた作品があったとしても、そのまま馬華文学と認めるのは難しいことである。ただハン・スーイン女士のいう如き、1912年に起源を求めるか否かの問題が残るが、ここでは一応馬華旧文学と馬華新文学に分け、ここでいう馬華文学とは馬華新文学を指す。

馬華文学の定義については既述七氏の所論を尊重するとしても、“形式は華語口語文で、内容はマラヤ主体”或は“中国に偏らない”等の条件には若干の疑問を禁じ得まい。例えば、英人により英語で書かれている、イギリス以外を題材とする文学はやはり英文学であろう。どんな国籍人種の作家が如何なる土地の題材を対象にして書いたかを厳格な条件とすることには、素朴な疑問がつきまとう。1982年度のシンガポール金獅賞⁹⁹入賞作はベトナム戦争におけるベトナム人老兵の悲劇を描いたものであった。この点ではシンガポールとマレーシアは既に重大なちがいが生じている。大雑把にいて、マレーシアの作家が華文で書いた作品ならば馬華文学とされてよい筈であるが、既述の如き条件を挙げねばならないのは、他の政治的理由に因るものであろう。ここに馬華文学の特殊事情がある。

さて、五四運動の影響で馬華文学が発生したとしても、その後中国大陆の社会、政治、経済、文化などすべてが変化した。一方、マレー地区——シンガポールを含む——の華人社会も大変化があったのは、既に述べた。五四の後、中国では新文学になり、今日では当代文学になっている。それらと馬華文学の間には一定の関係が

あるのは否定できないが、必然不可分の関係は認められない。むしろ今日では馬華文学はマレー地区の独自の事情を反映して、中国新文学・当代文学との間のちがいが目立っている。マレー地区の社会背景や文学の面での独自の事情については、これまで各章で述べたので、それらの基礎の上に立って馬華文学の変化やたかまりについて検討する。

◆ 1) 馬華文学の最初の高まり

馬華文学が当初五四運動の影響を受けたことや、執筆者の多くが中国からの渡来者や流亡者であったため、文学的傾向、編集の仕方——これらを文風という——が五四新文化の亜流であり、次にこの土地の独自性や風土と結合して南洋化、馬華化して行ったことには概ね議論の余地はない。

華人は英国植民地体制の需要に応じて南来した者が大多数であるから、華人社会全体としては英国植民地主義と共存して来たが、華人社会の中にも貧富の差が生じ、さまざまな社会矛盾が生じた。また、中国本土の労働運動や思想運動からもなにがしかの影響を受けた。1910年代20年代の華人社会の構造から見て、華人社会の力を代表する階層が華人諸社团や組織の指導者や経営者であることは言うまでもない。その上層階層たる頭家——タウケ・旦那衆——の文化が支配的になれば、一般の勤労大衆との間に対立感情が生じて来るだろう。また大衆の視点から見れば、頭家の向う側には植民地体制や英人の存在があることにも気が付くだろう。この点に着目すれば反封建、反不合理、反植民地主義、反帝国主義の論理も感情も容易に成立する。五四運動の影響を受けるのはこのような基盤があるからで、方修の所説は正論である。そこで、中国新文学と軌を一にして、現実暴露を任務とする現実主義文学が生れる可能性も否定できない。しかし、植民地経済の下で、華人が本国の同胞よりも恵まれた生活をし、野心に燃えて暮し得たのも事実であろう。また英国植民者の巧妙な分割支配や間接統治のため、一般の華人がこの社会に反逆せず、英人との関係を肯定

的に理解する者が多いとしてもおかしくはない。一般大衆の理想は社会への反逆をするよりも、努力して自らも何時の日か頭家になることであり、その可能性は中国本土よりはずっと大きかった。その実例は枚挙に暇がない。英国人のもたらした自由経済は、社会生活における自由主義を伴うものであるから、中国国内の反封建、反帝国主義の運動と全く同等のものをこの地の華人が意識することはあり得ない。従って馬華文学の誕生の理由を階級矛盾や反植民地感情にのみに求めるのは無理である。今日でも「英帝国主義は善い帝国主義、日本帝国主義は悪い帝国主義」式の理解をする華人知識分子は少なくない。他のことを一切考えず、華人と英人の関係のみに限定すれば、華人がそのように考えるのはそれなりの歴史的背景があった。

故に馬華文学は、反帝と反封建だけが誕生の理由ではなく、同時にこの地の華人の移民として、華人としての覚醒、自己認識のめざめの声として生れたものとしても考えなければならない。中国に五四運動がなくても、マラヤ華人には新しい時代を迎える素地はあった。五四運動はまたとない契機となったのであろう。

馬華文学はこのような華人意識のたかまりと中国本土の新しい思想の昂揚の影響の下に発生した。中国の五四運動は1919年に起ったが、馬華文学の誕生、すなわち最初のたかまりは一般に1919年から1925年にかけてとされている。ここで、方修、林明水、楊松年の三者の馬華文学発展の時代区分を紹介する。

方修の区分⁴⁹⁾

- | | |
|---------------|-------|
| (1)1919～1925 | 萌芽期 |
| (2)1925～1931 | 拡張発展期 |
| (3)1932～1936 | 低潮期 |
| (4)1937～1942 | 隆盛期 |
| (5)1942～1945 | 被占領期 |
| (6)1945～1948 | 高潮期 |
| (7)1948～1953 | 緊急状態期 |
| (8)1953～1956 | 反黄運動期 |
| (9)1957～1965 | 復興期 |
| (10)1965～1976 | 低潮期 |

林明水の区分⁴⁹⁾

- | | |
|---------------|------------|
| (1)1919～1925 | 萌芽期 |
| (2)1925～1931 | 南洋新興文学運動期 |
| (3)1931～1936 | 低潮期 |
| (4)1937～1942 | 抗戦文学運動期 |
| (5)1942～1945 | 被占領期 |
| (6)1945～1948 | 中興期 |
| (7)1948～1953 | 緊急状態期 |
| (8)1953～1956 | 反黄(反低俗)運動期 |
| (9)1957～1959 | 沈滞期 |
| (10)1960～1964 | 復興期 |
| (11)1965～1974 | 低潮期 |
| (12)1975～1980 | 覚醒期 |

方修の区分の仕方はこの方面では原型となっているがこれと林明水の区分の仕方は大体において重なる。新興文学は中国の革命文学に相当するものと考えてよい。

楊松年の区分⁴⁹⁾

- | | |
|--------------|--|
| (1)1919～1924 | 僑民思想濃厚期 |
| (2)1925～1926 | 南洋思想萌芽期 |
| (3)1927～1933 | 南洋色彩提倡期 |
| (4)1934～1936 | マラヤの地方性提倡期 |
| (5)1937～1942 | 現地郷土意識の挫折期 |
| (1942～1945) | 空白 |
| (6)1946～1944 | 馬華文学の独自性主張期 |
| (7)1949～ | 新中国の成立に因り、シンガポール・マレーシアと中国大陆の関係は一応断絶し、ここから新馬華文学は自己の進むべき路を摸索しつつ発展した。 |
| (8)1955～1959 | ここに見られた現地愛国主義文学はこの地区人民のアイデンティティが益々強まって来た証左である |
| (9)1965～ | 独立以降はシンガポールではこの共和国の国民の立場でシンガポール文芸の形成が始まっている |

楊松年の独特の考えに基づく色彩史観については既に述べたが、これも前二者のいう高潮と低潮の区分とは一定の対応が見られる。

◆ 2) 馬華文学の第二のたかまり

1930年代は中国国内では日本の中国侵略が進

行する一方、国共両党の間で囲剿と反囲剿の死闘が繰返された時期で、1936年は西安事変があった。反侵略、抗日戦争主張の声が全国に高まった時代である。このような状況下、国内での活動が危険となるか、不能となった政治青年や文学青年、文学者で中国を逃れて南来する者が少なくなかった。これらの人材は、中国僑民の立場から熱心な文筆活動をした。1937年の七・七事変にはじまる本格的な徹底的抗戦運動は馬華文学にも大きな影響を与えた。

この時期の馬華文学は、本国の文学と何ら変わるところはなく、中華民族の抗日統一戦線の一環として活動した。本国の抗日戦争がもたらした民族主義、愛国主義、英雄主義は南洋でも昂揚された。この当時、文学と無縁の大衆を含めて華人は挙げて抗日運動や排日運動に力を尽した。この運動は当然南洋華人と中国本土の意識の一体感を促進したので、色彩史観でいうところの現地帰属感、脱中国的傾向は一挙に後退し、「やはり中国が強大でなくてはだめだ」の思想でかたまった。そこで色彩史観の立場では現地郷土意識の挫折期という表現になる。この時期の抗日愛国運動は人材の充実もあって、馬華文学の第二のたかまりを招いた。

この期間、華人は富翁から大衆に至るまで協力一致して巨額の献金を本国に送り、技術報国団など本国の前線に向った。この愛国的民族運動の実行に当り、馬華文学は華人の思想動員、激励、精神の昂揚の為にその力を発揮し、馬華文学の作品も抗戦文学の内容を以て発展した。

なお方修、林明水の区分において1931—1936が低潮期とあるが、この時期は中国本土では1931年の九一八事変にはじまる激動の時期であり、また江西省を中心に激しい国共内戦の時期であった。1936年は魯迅の死去した時であるから、上海を中心に所謂文化囲剿の戦いの最中である。この状況が南洋に反映せず、文学活動の昂揚も見られなかったのは、当時の国共両党の南洋における力関係を反映しにものであろう。明らかな左翼的文学活動は当時のマレー地区では存立できなかったし、大方の支持を得られな

かったのであろう。但し、馬共が1930年に成立していることを見逃してはならない。

◆ 3) 馬華文学の第三のたかまり

1941年、第二次大戦が起ったので、華人は既に4年間続いてきた抗日戦争の最終的勝利に現実的期待を持つに至った。マレー戦線での緒戦では、少なからぬ華人志願兵が前線と後方で英軍のために働いた。しかし、英軍は大敗し、華人はその後3年8ヶ月にわたり日本軍の支配下に暮した。この間一部の華人が山中のジャングル或は地下工作員として抗日運動を行なったのは既に述べた。抗日遊撃隊などの資料は多くないが、1984年、シンガポールの研究者蔡使君女士が《新馬華人抗日史料》を世におくった。しかし文学方面の資料はない。

馬華文学はこの間一片の空白と評価されるが、多分山中のゲリラ部隊や地下工作員の活動を描く作品も若干はあったであろうが、今日それらを見ることは難しい。この空白時代の実態は如何なるものか、現地の華人文学者はその期間の文学史の研究の責任は日本人にあるといっている。

1945年日本は敗戦し、馬華文学は活動を再開した。当時華人の喜びについては既述した。しかし、その後華人は紆余曲折を経て、全く意料外の現実と直面することになった。

戦後、マラヤの独立が現実の問題となり、華人が新しい国の公民になることが周知の事実となっていたが、それでもなお華人の僑民意識は簡単にぬぐい去れるものではなかった。また、中国大陆の革命戦争では中共の有利が伝えられており、僑民としてこの革命を声援するのかが、極めて重大な思想問題となっていた。即ち、現地の独立運動に順応することに重点をおくのか、或いは中国革命に重点をおくのか、何れの態度をとるのかをめぐって、1947年から48年にかけて“馬華文学の独自性”の問題として大論争が行なわれた。前者を主張する者は、後者に属する作家を非難し、彼らは単なる滞在者、避難者であり、現地の事情にうとい、僑民作家であり、現地の華人を蔑視する中華思想ショ-

ヴィニズムが見られると指摘した。ほんとうの馬華文学は前者の立場に立ち、華人でもマラヤ人民として、南洋の環境を重視し、複合社会での融和を求める精神、独特の生活感情を基盤にして、中国文学とは別の性質をもつ独自のものに成長すべきだと主張した。僑民文芸の作家と名指された人々は直ちに反論した。この問題は一言でいえば、忠誠心を現地におくか中国におくかの問題で、択一を迫られては困る問題であろう。また、問題提起の背景には、華人を僑生や永住者と臨時的滞在者に分け、馬華と僑民に分ける視点がある。中庸の立場に立つものは、これに反対し、客観的に見て華人には二つの任務がある。一つは中華民族の一分子として中国の民主主義と平和をかちとることであり、一つは現地人民の一分子として、現地の民主と自由をかちとることである。この二つは対立の統一である。その片方だけを主張するのは誤りだと主張した。

マラヤ華人をめぐる状況の特殊性を強調する人々は、馬華文芸の独自性を主張することになるが、論争の焦点は、文芸の普遍性と特殊性の問題、形式の問題として中国南方の民間芸術がどの程度まで容認されるのか、他の諸民族のもつ芸術や価値観とどのように融和すべきであるのかなど幅広いものがあつた。今日の政治的現実から見れば、この論争には天真爛漫さや華人の手前勝手さを感じざるを得ないが、実はこの問題には華人にとっての永遠の課題としての性格がある。これが複合社会における最も鋭敏な問題、アイデンティティ問題に触れるからである。

馬華文学の独自性は次のように考えることができる。

1. 中国文芸の焼きなおしではいけない。
2. 僑民文芸ではいけない。
3. マラヤの文芸を構成する主要な成分であるべきだ。
4. 人民性と民族性を重視する。
5. 現地の社会生活、風俗習慣を融和させるもので、言語はより豊かに、形式はより多彩にな

るべきだ。

些か理想の羅列に流れたきらいはあるが、文学文芸に限らず、これらの中には華人社会そのものがかかえる深刻な課題がひそんでいる。

戦後、マレー半島でも毛沢東思想を奉ずる馬共が武装叛乱をして、植民地反対と独立獲得のための闘争を進めた。英国は1948年から1953年まで緊急状態法を施行し、戒厳状態に入った。華人は一転して弱者の立場におかれ本来馬共と無関係の華人も不利を受けたが植民地主義反対の思想そのものは一部華人知識分子に評価された。

この法令の施行中は、言論出版が制限されたので、馬華文学は事実上完全に停頓し、その代りの読み物として台湾や香港の低俗読物——黄色文芸という——が輸入された。1953年緊急状態法が解除されるや、馬華作家は直ちに反黄運動——低俗色情文学への反対——を行なった。この運動は表面的には文学運動であるが、同時にそれは無視され続けた華人の尊厳と権利の回復運動であり、アイデンティティの確認運動であった。

マラヤの独立が見通される頃になると、華僑意識は後退し、現地の公民としての華人意識が優位を占めることになる。戦争中に昂揚された中国本土との一体感は弱まって行く。この段階は華人にとっては政治的に苦痛な時代で、戦後のかりそめの勝利の喜びの後、華人はつぎつぎに不利な現実と直面し、それに反撥する心情は華人社会に民族団結の要求と一種の思想的なたかまりとを呼び起した。馬華文学はここで第三のたかまりを迎えた。

◆ 4) 馬華文学の第四のたかまり

1957年マラヤ連邦が独立した。しかし独立準備のための憲法制定会議は英人とマレー人が主体で、華人は無視された。憲法には宗教や言語などをはじめ、マレー人優先の原則がある。政策としてブミプトラ政策——マレー土着人優先主義——が実行された。文化政策の上では「国家文化」が規定されたが、これは 1. マレーシアの文化は土着人文化を主流とする。2. 非マレー

土着文化のうち、すぐれた部分は採用する。3. マレー土着文化はイスラム文化を基盤とする、と規定したものである。それに伴い 1. 国家文学——マレー人がマレー語で書いた作品、2. マレーシア文学——非マレー人がマレーシア語で書いた作品、3. 移民文学——非マレー人がその母語で書いた作品、以上三種の差別的類別をした。

1965年にシンガポールが分離独立すると、マレーシアの華人人口はマレー人よりも劣勢化し、これまでシンガポールに本部を設けていた来た華人社団は本部と絶縁して、マレーシア国内で再編することになる。すべての団は外国との関係を禁止されたが、それはシンガポールとの関連を禁ずる措置である。

マレーシアの建設が軌道に乗り、国家の基本構造がはっきりするにつれ、上述の如く華人は種々の差別のもとで地位が低下し、恒常的に弱者の身分を与えられることになった。1969年5月13日の五一三流血事件の結果、“マレー人政府の華人に対する政策はより真剣になった”とある知識華人は語った。そして華人の希望は“この社会に受け容れられること”であると語った。華人は政府により不公平に扱われていると確信して居り、政府施策に反撥し、しばしばその改善を要求している。しかし、表立った反抗もできないため、抵抗の場を教育、言語、文芸などの文化や意識の分野に置くより他はないと感じている。

それ故に、華人社会における馬華文学の存在意義が今日ほど高まった時代はないと言える。馬華文学は苦境に喘ぐ華人の声、アイデンティティを求める華人の声、自己の尊厳を求める華人の声を伝える場となった。華人の結束と連帯は文化の面を通じて行なう他に手段はないと感ずるに至った。金銭第一の華人社会は文化や文学を余り重視しない嫌いはあるが、今日の馬華文学はマレーシア華人社会の規模に比べれば、質も量も充実しており十二分にその使命を果たしつつあるといえる。マレーシアにおける華人の苦痛は馬華文学を進めるエネルギーとなっており、それは曾ってない質的量的なたかまりを見

せている。数多くの文学団体の成立、活潑な創作活動、出版活動、展覧会等の啓蒙活動、言語教育等々馬華文学、馬華文化は、一種の復興運動期に入ろうとしている。ここで残る問題は小学校はじめ公教育における華語教育の問題である。現在マレーシア政府は国語——マレー語——化教育を推進しており、華語系小学校で一週数時間の華語科目を除いては中学以上では華語の授業を認めていない。そこで、華人社会は公的な学制の枠を外れた独立中学(中・高含む)を各地に設けている。言語問題と教育問題は今日華人社会の命脈を制する最重要問題であり、文学の作家と読者の数を保障する必須条件でもある。マレーシア政府がすぐさま華語教育を全く廃止することは考えられないが、華人は華人社会が金銭重視の商業民社会であるにかゝらず富翁から貧民に至るまで、言語や教育という文化範疇に属する問題が、実は自分たちの重要問題であることをよく知っている。馬華文学が存立する所以もそこにある。現在、馬華文学は第四のたかまりの中にあるが、それは華人社会の面臨する問題が極めて深刻なことを反映するものに他ならない。

一般に、馬華文学は華人社会が何らかの困難に遭遇したときに勃興している。馬華文学の高潮と低潮はこの間の事情を物語っている。

結 語

馬華文学は中国の五四運動の影響下に誕生したという定説があり、マレーシアとシンガポールの人々はそれを誇りにさえている。しかし、この文学の発展の経過と今日の状況は、必ずしも中国の新文学や当代文学と同じものでないのは多言を要しない。五四の影響の下に発生しながら、中国新文学と同じものになり得なかったのは、馬華文学の背景が中国新文学の背景と異なるからであるし、だから馬華文学の独自性もそこから生れるのである。

馬華文学の理解のためには、その独自性をもたらす社会背景、歴史背景をまず理解する必要がある。その歴史や社会背景を検討理解する

際、華人の生活のよって立つ文化のあり方をはっきりと認識してかかる必要がある。ただ表面的な正統な中国学だけに頼るのでは不十分である。明代よりも遙か以前に始ったマレー華人史は、19世紀に爆発的な発展を遂げたが、その間には天地会の流を汲む秘密結社や各種各様の宗教や土俗信仰がかかわって居り、また英国人やマレー人社会の諸階層、スルタンなどもそれぞれに華人史とかかわっている。従って表面に現れない裏話や伝説的説話、またそれを現代華人がどのように受けとめ、評価しているかも甚だ重要な意味をもつ場合がある。その方面の材料を得るには、文献資料、文書資料に劣らず、聴き取り活動が重要となって来る。筆者は、その様な立場から、この数年現地での聴き取りと実地踏査に重点を置いて調査をして来た。

本論文は、華人社会の歴史の概要について、特徴的なやま場を中心に述べ、次にこの歴史の上に乗って誕生し発展した馬華文学のいくつかのたかまりを理解することを試みた。本論文は特に定説に支配されぬ注意を払いながら、定説の疑わしい点については、その旨を明らかなし、今後の研究課題がそこにあることを述べた。

今日なお、マレーシア華人社会には流動的要素が多く、華人社会の未来図は予測し難く、従って馬華文学の将来への可能性も推料し難いものがある。しかし、敢えて大胆な予測を試みるならば、マレーシア華人は、シンガポール華人と異り、置かれている環境がきびしいだけに、却って一体的帰属感——アイデンティティ——への志向も強く、言語問題にもより一層戦闘的な姿勢でとり組むものと考えている。従って、馬華文学も暫時発展に向うものと考えられる。少なくともシンガポールの華文文学よりは強力な存在であることは間違いない。

注

- (1) 鄭良樹 マレーシア公民、国立台湾大学文学博士、現在国立マラヤ大学中文系主任。《淮南子通論》はじめ著書論文多数。
- (2) 鄭良樹著・華人文化史論叢（卷一）・1982年・新加坡南洋学会出版。

- (3) 成田節男著《華僑史》昭和16年8月・螢雪書院発行。
- (4) 小型家産制国家：矢野暢《東南アジア世界の構図》昭和59年8月・日本放送出版協会発行；同氏著《東南アジア世界の論理》昭和55年3月・中央公論社出版を参照のこと。東南アジアに見られる領域国家に非ざる「点」「村落」として成立する小規模権力体。河川の支配を権力の基盤とし、領域支配の観念と実践に乏しく、分節的でルースな社会の上に成立する、ヒンズーの王権思想に拠る小規模な家産制的権力。
- (5) 吳華著・馬來西亞華族會館史略・1980年11月・新加坡東亞研究所発行・1頁。
- (6) 許雲樵・新加坡一百五十年大事記・1969年・青年書局発行・30頁
- (7) 同上・40頁
- (8) 華僑史（(1)に既出）・276頁
- (9) 華僑史（(1)に既出）・272頁
- (10) 華僑史（(1)に既出）・279頁
- (11) 帮派：地縁により成立した華人の団体を幫という、例えば潮州幫、福建幫、客家幫。また同一結社、血縁団体等も幫といい、大小を併せて幫派という。
- (12) 華僑史（(1)に既出）・289頁
- (13) 田農・サラワクの作家・1940年クチンに出生・香港に留学・《子夜詩抄》で認められた。
- (14) 田農著・砂撈越華族社会結構と形態・1977年5月・新加坡聯合文学出版社発行・13頁。
- (15) Victor Purcell 著《THE CHINESE IN SOUTHEAST ASIA, 1965》郭潮章訳・民国55年10月・正中書局発行・505頁。
- (16) 方修・本名吳之光、潮州人、1921年生。シンガポール公民。シンガポール星洲日報総編集、シンガポール大学中文系非常勤講師を歴任。1960年から《馬華文学史稿》など24冊の著作があり、最も大きな作業に《馬華新文学大系・全10冊》がある。
- (17) 蔡使君編《新馬華人抗日史料》1984年10月・シンガポール文史出版私人有限公司発行。
- (18) 何家良、広東省順德県出身、シンガポール公民、南洋大学文学部卒、シンガポール文部省政務次長、引用の部分は1983年1月13日シンガポールで挙行された International Chinese Writer's Forum 開会式での発言。
- (19) 伍良之、本名梁冠中、1942年ベラク州で出生、

- 《路過文冬嶺》《都門集》《冬眼集》等作品多数。
馬華作家の中で最も期待されている作家の一人。
- (20) 楊建成著《馬來西亞華人の困境》1982年2月、台北文史哲出版社発行、238頁。
- (21) 鄭子瑜、福建出身、1916年生、1938年南渡、シンガポール師範学院講師、南洋学会編集委員会委員、早稲田大学客員教授等を歴任、《剪春集》《青島青》《古書辨惑》《中国修辭学的變遷》はじめ著書多数がある。
- (22) 鄭子瑜が1960年10月8日、シンガポール文化館で開かれたマレーシア社会学研究院の学術講演会で発表したもの。
- (23) ハン・スーイン（漢素音）
中国人の父ペールギー人の母をもつ混血児。医師で女流作家。燕京大学、ブラッセル大学に学ぶ。抗日戦争を舞台にして《DESTINATION CHUNGKING》を作った。混血女性の恋を描いた映画《慕情》の原作者。
- (24) 李汝琳、河南省出身、1914年生、北京大学卒業、1944年《中国周報》《中国日報》の編集者としてカルカッタに行き、1947年からシンガポール師範学院講師、南洋大学副教授、青年書局《新馬華文芸双書》の編集者等を歴任。該双書は計36冊の大部である。
- (25) 苗秀、本名盧紹権、1920年シンガポールに出生、祖籍広東三水。1948～1950星洲日報副刊《晨星》を編集、華僑中学の英語教師、南洋大学中文系副教授を歴任。1970年教育出版社の《新馬華文文学大系・8冊》を編集。シンガポール作家協会副主席をした。《シンガポールの屋根の下で》《人畜之間》《馬華文学史稿》など著作多数がある。
- (26) 方北方、本名方作斌、1919年広州で出生、祖籍広東恵来、1928年南渡、1937年広東南華大学入学、1945年再南渡。中学高校教師を歴任、現在ペナン韓江中・高校教師、《ペナンの72時間》《頭家門下》《ニヨンニヤとパパ》《風雲三部曲》はじめ作品多数がある。また《馬華文芸泛論》などの理論的著作もある。マレーシア作家（華文）協会主席を経て現在顧問。
- (27) 林明水、筆名孟沙、1941年ジョホール州セガマトで生れる。祖籍海南島、南洋大学中文系卒業、1967年から南洋商報入社。青春出版社を作るなどの文芸活動をした。詩集《四重奏》小説《愚人》はじめ作品多数がある。マレーシア作家（華文）協会主席を経て現在理事。
- (28) 吳天才、1936年クアラルンプル生れ、南洋大学、シンガポール大学を卒業、中学教師の後、マラヤ大学中文系副教授兼系主任になった。華・英・マレー語の作品の翻訳の業績が大きい。詩集《流水行雲之夢》をはじめ作品多数あり、理論面では《馬華文芸作品分類目録》《馬來班頓小説》など著作が多い。
- (29) 楊松年、1941年シンガポール生れ。南洋大学卒、香港大学で哲学博士、現在シンガポール大学中文系講師、1981年シンガポールと文芸研究会初代会長。《新馬華文文学論集》はじめ著作多数がある。
- (30) 方修著《馬華新文学史稿・上巻》1962年2月、星洲世界書局発行。
- (31) 方修編、《馬華新文学大系の理論批評一集》1972年5月、星洲世界書局発行。
- (32) 華語系華人：マラヤ、シンガポールには教室での教育用語英語・華語・インド語・マレー語などのちがいにそれぞれ語の源流校——Stream School——に分られる。そこで華語源流校出身者や旧時代の華人学校の卒業生を華語系華人という。英語源流出身者との間に、英語と華語の学力のちがいがあるばかりでなく、教養の中身にもちがいがある。現在シンガポール、マレーシアの上層知識階層や高級官僚は英語系華人が多い。二つの源流出身者は社会的に若干の競争対立の雰囲気がある。
- (33) 苗秀著《馬華文学史稿》1968年1月、シンガポール青年書局発行。
- (34) 方北方著《馬華文芸泛論》1968年1月、クアラルンプル長青書屋発行。
- (35) 頼観福編集《馬華文化探討》の中にある〈孟沙・馬華文芸の発展〉1982年、馬來西亞留台同学会連合總會発行。
- (36) 吳天才著《馬華文芸作品分類目録》1975年4月マラヤ大学中文系発行。
- (37) 楊松年著《新馬華文文学論集》1982年4月・南洋商報発行
- (38) 金獅獎作品：南洋商報が1981年6月に設けた文学賞。1982年11月に第一回授賞があった。小説、散文の二部門がある。第一回授賞小説一位は謝恵平（筆名希尼尔）《將軍淚》、散文一位は丁行堯（筆名尤妮絲）《刀縁》であった。第一回受賞作は

- 金獅獎獲獎作品集》1982年5月・南洋商報文芸双
書として南洋商報・星洲日報出版部から出版。
- (39) 方修著《馬華新文学史稿》上卷（前掲）
- (40) 林明水《馬華文化探討》（前掲）
- (41) 楊松年《新馬華文文学論集》（前掲）